

## 第47期生 附属釧路中学校平和宣言

今から71年前、1945年8月9日午前11時2分、アメリカ軍B-29が投下した原子爆弾により、長崎の街は一瞬で焼け野原となってしまいました。私たちは、その事実を、原爆の恐ろしさを知らないまま教科書で教わりました。そして今回、長崎を訪れる機会をいただき、1ヶ月前から原爆について学び、私たちは今まで知らなかったあの日の長崎の悲劇を知りました。原爆投下によるあまりにも多い負傷者の数に、医療器具や薬品は不足し、十分な応急処置ができず、手術も麻酔なしで行ったということなどを知り、たいへん驚きました。また、放出された放射線が大勢の人々を死に追いやっただけでなく、放射線のために引き起こされる病気や障害は、生き残った人たちを今もなお、苦しめていることも知りました。

実際に起こったこれらのことに対し、私たちは真剣に向き合うことはしていませんでした。それは、平和である環境に慣れてしまい、平和であるということのありがたみに、気づくことができていなかったからだと思います。被爆者の平均年齢は80歳を越え、「被爆者のいない時代」を迎えつつあります。このままだと、あの日起こった、長崎の悲劇が日本人の記憶の中から薄れていってしまうと思います。そうならないためにも、私たち、若い世代も過去に向き合わなければならないと強く感じました。

長崎で大きな被害をもたらした核兵器は、現在世界で約1万5千個も存在しています。これらがもし再び使われるようなことになってしまったなら、友達と話をすること、家族のぬくもりを感じることも等、当たり前な日常の全てが奪い去られてしまうでしょう。ですから、核兵器のない世界をつくっていかなくてはならないのです。そのためには、世界中の人に原爆について知ってもらうことが大切だと思います。唯一の被爆国である日本だからこそ、伝えることができるのだと思います。

私たちは、今回の長崎の訪問とそれに関わる事前学習を通して、平和の尊さに気づくことができました。「世界から核兵器をなくし、悲劇を繰り返してはいけない」という私たちの思いを、釧路に帰っても、周りの人、後世へと伝えていきます。そして、伝えるだけでなく、今後、平和を守るために私たちができることを考え続けていきます。

私たちが生きているこの環境、この瞬間は、貴重なものであるということを忘れず、「恒久平和とは何か」「戦争をもう二度と起こさないために何ができるのか」を深く考えること、平和を願い、生きていることに幸せを感じ、感謝すること、自分を、そして周りの人を大切にすること、小さなことでも率先して自ら考え行動していくことを誓います。

平成28年12月5日  
北海道教育大学附属釧路中学校第47期生一同